よさこいという名のコミュニティ
―犠牲を払ってまで継続する訳―

山手　一輝

論文要旨

本稿は、なぜこれほど多くの人が「よさこい」と呼ばれる踊りや祭りに、多大なるコストを負担してまで関わり続けるのかを分析することを目的としている。近年、よさこいには、学生だけでなく、社会人や子どもから高齢者まで多様な世代が参加し、大きな盛り上がりを見せている。しかし、衣装やチーム運営のためにかかる費用や、練習のためにかける時間と体力など多大なるコストを負担してまでよさこいに関わる動機や理由はほとんど未解明である。そこで、本稿は筆者が2年半所属していた豊田市の学生のみで構成されるチームと、約1年間近く所属し、現在も活動中の名古屋市の社会人中心で構成されるチームでの経験をもとに、なぜ多くの人がよさこいに関わり、踊り続けるのかを明らかにしていく。

よさこいを継続するためには、よさこいチームというコミュニティを形成するか、あるいは、一つの居場所を作ることによって、そのチームで踊り続けることにどれだけのメリットがあるかを自ら体験することが必要である。メリットは、格好いい衣装で踊りたい。好みの振り付けで踊りたい。気に入った楽曲で踊りたい。祭りや練習後の雑談､打ち上げが楽しい。責任のある役職を任せてもらえるなど､人それぞれによって多岐にわたるものとなるだろう。それらすべてを揃えたとしても、団体での活動で、気の知れた友人や、自分を受け入れてくれる存在が見つからなければ、チームから脱退する要因となる。

チームそれぞれの魅力が分かりやすく伝わり、継続してチームに参加する人が増え、そこからよさこいの魅力を伝えるようにしていくことが、今後の課題である。

第1章　薄れゆく繋がり

第1節　現代社会のコミュニティの実態

現代社会において、繋がりの希薄化というものは確実に進んでいる。地域との繋がりや、親戚同士の繋がりというものが薄くなり、人は一人でも生きていくことの出来る社会となっていった。人と繋がるかどうかを自分の意思によって決定出来る｢選択的関係｣が主体となっている今の社会で、わざわざ繋がりを求めること、更には自分が相手から繋がりを求められることの二つの要因をクリアし、そう言った関係を数多くこなしていくことでようやく作り上げられるコミュニティというものに、そこまでの手間をかけて繋がりを求める人々は減っていっているのでは無いだろうか。

更に選択的関係によって人との繋がりを選択できるということは、裏を返すと相手からも選択されるということである。これにより、自分は人との繋がりを持っていたい、この人と仲良くなりたいという欲求が産まれたとしても、相手に選択されなければただ拒否をされてしまうというリスクが存在する。このリスクにより、相手から拒否されて精神的な苦痛を背負うくらいならば一人でいた方が良いといった考え方に至り、本心ではないものの孤独を選

んでしまう場合も存在する。

現代社会の繋がりがより希薄化していっている要因の中に未婚率の上昇というものも存在する。家族という結び付きの強い関係を結ばずに、友情という柔軟な関わり方の出来る状態の人間関係を築きあげ、孤独からは逃れるが強い結び付きも無いことを選ぶ人が増えているという。これは、現代社会において多くの人が居場所と定義づけているものの変化が起きているのでは無いだろうか。

本件の参考として読ませていただいた文献（石田光規、2018）（デボラ・チェンバース、2015）において、新たなコミュニティ生成の場としてインターネットに可能性を見出している。確かに現代において効率的な出会い方であり、関係を築くのも切るのも簡単な場である。しかしそれだけでいいのだろうか。人と人とが直接的に関わり生まれるコミュニティは、このまま縮小の一手を辿っていくだけなのだろうか。

第2節　友人という立場

繋がりの代表格として挙げられるであろう関係性「友人」。友人関係の大まかなとらえ方についての分析を行うために「世界青年意識調査」のデータを見てみる。どんな時に充足感を感じるかという問いに対して、友人（恋人を含む）や仲間といる時という選択肢は高い水準で安定して選択され続けている。

ではどのような仲の相手を友人という枠組みに入れるのかを見てみると、お互いに自己を開示しながら仲を深めていく「従来の」ものに、極力本音を見せず、その場の空気を共有する「新しい」ものが加わりつつあると指摘されている。自分の中に大きな悩み事が生じた際に相談相手として友人より、母親を選ぶ年齢層があらわれていたり、友達との会話の中で、意見のぶつかり合いが発生した場合に、納得いくまで話すという意見より多少自分の意見を曲げてでも争うのを避けたいという意見の方が多く出ていたことから考えられた結論である。

つまり、友人という関係が過去に比べると徐々に薄いものへと変化していっているのではないかというのが考えられる結果である。友人と過ごす時間は多くの人に充足感を感じさせるものであるはずだ。しかしながら近年その友人と呼ばれる関係性に変化がおき、ただ空気を共有するためのものとなっているのであるなら、選択的関係から、繋がりを切り離していく人間が増え続けていくのも納得できる。親密な関係性というものはどのようにして形成されるのだろうか。

第3節　対面により形成されるコミュニティ“よさこい”

「よさこい祭り」は、昭和29年（1954年）に高知県高知市で戦後経済復興の足掛かりとなることを目指し、商店街が中心となり始まった。徳島阿波踊りに対抗するため、年にお米が二度とれる土佐、ならではの鳴子（鳥を脅かすための道具）を使って踊ることが決められている。

そんな「よさこい祭り」が北海道に伝わり「YOSAKOIソーラン祭り」が産まれ、その「YOSAKOIソーラン祭り」に衝撃を受けた学生の手により、「にっぽんど真ん中祭り（通称どまつり）」というものが産まれた。どまつりは年を重ねていく中で鳴子を持たなければならないというルールを外し、正式には「よさこい」のお祭りではなくなった。

そんな鳴子を持たないどまつり系のチームに対しても、これはよさこいという踊りではないという声も多々聞こえる。そういった意見は至極全うではあるが、どまつりを本祭として

踊ってきているものとしては今自分たちが踊っているものを、ずっとよさこいとして認識している。そのため本稿では高知の「よさこい祭り」北海道の「YOSAKOI ソーラン祭り」愛知の「にっぽんど真ん中祭り」、その他関係者によさこいとして親しまれている祭りや踊りを全て「よさこい」として表記させて頂く事を先に謝罪申し上げる。

よさこいをやるために集まり、一つのチームを形成する者たちは直接会うことによって一つの作品を作り上げ、演舞として披露している。これは様々なチームによって状況が異なっていたとしても変わらないはずである。近年祭りの形態がコロナにより大きく変わり、実際にメンバーで集まり、現地で踊らなくても作品を披露できる形態になってきているが一旦それを置き、祭りで踊って作品を披露する集団であるならどのような手段をとったとしても祭り当日にはメンバーが直接的に顔を合わせるからである。

更に祭りが大きなものであるならば、そこには他チームと比較対象を行われ、優劣をつけられる審査というものが存在するケースが多いに存在する。この審査において優秀な結果を残し、チームや作品のブランド力をより大きくすることを目標としているプレイヤーも多く存在するのがよさこい界隈なのである。

私が実際によさこいチームに所属し、にっぽんど真ん中祭りというお祭りで優秀な賞を目指しながら活動をしてきたり、同じような境遇の人間と会話したりといった中で強く感じたことは、「強くあり続けることを目指すチームメイト同士が、意見のぶつかり合いなしで共存し続けることは不可能である」ということだ。よさこいチームにはそれぞれ一定数以上のメンバーが所属し、それぞれが息を合わせて一つの作品を作り上げていくものである。そんな中で、いい成績を残したいと思うメンバーがそれぞれ「良い作品」や「良いチーム」を作るために行動すれば衝突が起きるのは自明の理である。なぜなら、「良い作品」や「良いチーム」に答えなどないからである。それぞれの意見がぶつかり合い、削りあった結果、納得のいく作品が出来るのであり、そのために行うミーティングではたとえメンバーとの関係性が危ぶまれるほどの衝突であってもきっちり納得いくまで話し合わなければならない。

ここまでに直接的な関わりを強要されるような団体に所属をし、自分の自由な時間や、お金を割きながらよさこいを続ける意味とはいったい何なのか。それを解明していくことが本稿の最大目的である。

仮説として、よさこいを続けることによって得られるコミュニティを大事にしたいから。もしくはよさこいで作り上げたコミュニティから抜けるのが嫌だからというものが挙げられる。よさこいで出来た繋がりを一つのコミュニティとして認識している人は多いのではないかということをこれまでの活動から予想した。特に前述したように、メンバー間でのやり取りの中には空気を共有するだけといった上辺だけの関係ではなく、本気の意見をぶつけ合わせなければならないことも多々あるため、より強固な関係性が生まれるということもあるのではないかと予想される。

第２章　よさこいチームの実態調査

第１節　チーム所属体験談

筆者が関わってきた２か所のよさこいチーム（中京大学　晴地舞、笠寺いちり）での活動経験について述べていく。

中京大学　晴地舞
所属期間
2018 年 5 月～ 2020 年 8 月
練習日
毎週火水木曜日、17：40 ～ 20：10　そこから自主練
練習場所
中京大学敷地内、豊田スタジアム前の高架下
メンバー数
60 ～ 100 人
参加のきっかけ
　大学一年生時に新入生歓迎会にてどのような活動を行っているのかを聞いて興味を持ち、そこから何度かの体験練習を経て入部を決意。大学の部活動やサークルの中から参加する団体を探していたため、他のよさこいチームのことなど知らない状態で入った。
チームでの主な活動
　週に三回の練習のほか、様々な班に分かれて作品の制作作業を行っていた。どこの班にも所属していない人も一定数いたが、多くのメンバーがどこかには所属しており、オリジナル作品の作成のため、練習後の時間や、練習日と別の日に集まり、ミーティングや作業に勤しんでいた。

役割	人数	仕事内容
幹部（制作班の長を兼任している人もいる）	7	チームの運営内容や、作品の中心的なミーティングも行う
振り班	1 学年 4 人前後	作品の振りや構成の制作、練習での指導
衣装班	1 学年 4 人前後	作品の衣装のデザイン作成、練習用のデザイン作成
道具班	人数制限なし	作品の大道具作成、演舞内での幕を上げる
MC 班	1 学年 3 人前後	作品内での MC の文章作成
渉外班	人数制限なし	チーム外との交流、公式 Twitter の運用

笠寺いちり
所属期間
2022 年 9 月～現在
練習日
毎週水曜日 19：30 ～ 21：30　土曜日 18：30 ～ 20：30　祭り近辺は変更することも
練習場所
白川公園、矢場町付近の高架下
メンバー数
サポートスタッフを含めると 70 人ほど、踊り子のみだと 20 人ほど
参加のきっかけ
　大学一年生時、バサラカーニバルというお祭りにこの祭り限定の踊り子として参加。メンバーの方々の優しい指導や、踊り子全員が扇子を使うという独自の演舞に惹かれ、晴地舞所

属時にも何度かお世話になっていた。大学三年の８月に晴地舞を引退し、所属チームが無くなったタイミングでメンバーの方から誘われて参加することとなった。

チームでの主な活動

作品作りや運営のためのミーティングは週どのくらい行うかなど決まっておらず、各担当のメンバー間で日程を合わせて行っている。これはメンバーのほとんどが社会人であることによる学生チームとの違いだと考えられる。

活動拠点を愛知県名古屋市南区笠寺町としているが、毎回の練習場所は交通の便が良い中区で行ってはいるが、地域に愛されるチームとなるため、笠寺の中で作品を披露する場を作ったり、笠寺のイベントに出演したり、まちづくりのためのミーティングなどにも参加し、地域とのつながりを強めていっている。

役割	人数	仕事内容
運営スタッフ	５人	チームの運営のためのミーティングを行う
振り班	５人	作品の振りや構成の制作、練習での指導
衣装班	４人程	作品の衣装のデザイン作成、練習用のデザイン作成
レンタル衣装の管理	人数制限なし	作品の大道具作成、演舞内での幕を上げる
地方班	２人程	地方車デザイン作成、どまつりでの地方車管理
祭り班	３人程	参加する祭りの事務作業（参加エントリー等）
広報班	４人程	公式 Twitter、Instagram の運用
救護班	３人程	救護アイテムの準備と管理、メンバーへの注意喚起

第２節　よさこい経験者アンケート調査概要

〈調査対象・方法〉

よさこい経験者調査は、筆者が同じチームとして活動していた人たちに LINE を通じてと、よさこいチームに過去に所属したことのある人を対象に、Twitter で拡散を協力してもらいながら Google フォームにて回答してもらった。アンケート項目は以下の通りである。

〈アンケート項目〉

・これまで所属してきた、現在所属しているチームと、その期間。
・よさこい活動を始めたのはなぜか。
・所属している、していたチームに入りたいと思ったきっかけは何か。
・チーム内での立場として経験したことのあるものは何か。
・チーム内でなにかしらの班へ所属したことはあるか。
・よさこいをしていく中で、どんなことが楽しいか。
・なぜよさこいに継続して参加出来ていたか、出来ているのか。
・よさこいを辞めたいと思ったことはあるか。
・どのような理由で辞めたいと思ったか。
・よさこいチームから自分の意志で脱退したことはあるか。
・チームの脱退した理由。
・なぜ辞めたいと思ったときに辞めなかったのか理由。

・よさこいを始めてから今まで、よさこいをやっていなかった期間はあるか。
・辞めた後や休止した後、メンバーとの交流はどのくらいの頻度であるか。
・よさこいを辞めた時や休止している時、喪失感のようなものを感じたか。
・喪失感をどのように乗り越えたか。
・所属している、していたチームに、信頼のおけるメンバーはいるか。
・所属している、していたチームに、悩みや心配事があった場合に相談したいと思えるメンバーはいるか。
・チーム運営や作品制作、その他チームに関する話し合いなどでメンバーとの意見が対立した時、どのような対応をしていたか。
・あなたにとって、所属している、していたチームとはどのような存在か。
・現在のよさこいについて、今の心境はどのようなものか。

〈調査結果〉

◦よさこい活動を始めたのは何故か

よさこい活動を始めたきっかけについて調査を行った結果、交友関係を広げたかったからというものが一番多かったから。次いで踊ることが好きであったり、祭りに参加してみたかったと続いている。

よさこいの中でも、社会人チームと、学生主体で行う学生チームなどというように年代別にチームがある事は、前述したチーム所属体験記から確認してもらえると思うが、今回の調査の中には、これまで所属してきたチーム、現在所属しているチームの記述を見ると、学生チームを経験している人も多く回答してくれていた事が伺えた。学生チームは大学での部活動やサークルという形でも存在しているため、多くのメンバーがはいるよさこいの部活やサークルに入り、同じ大学の友達を増やそうと思う人が多いのではと思われたが、実際交友関係を求めて入っている人間が多いため、そういった人が多かったのもあるのではないかと推察される。

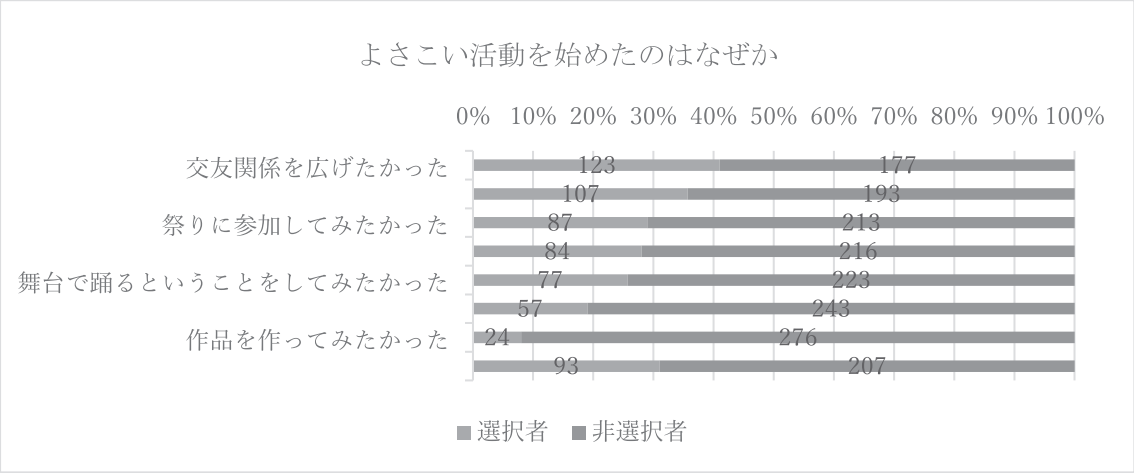

図１　よさこい活動を始めたのはなぜか

◦所属している、していたチームに入りたいと思ったきっかけ

次に、よさこいを始めたきっかけとは別に、そのチームを選んだきっかけについて調査を行った結果。祭りで演舞を見て、興味を持ったというものが一番多かった。次いで新歓で誘われた。知人に誘われた。と続いていく。

チームに入る前に演舞を見て、それに憧れて入ったという意見が一番多かったのは予想外であった。入る前に演舞を見る機会があるという事はその前に一度祭りかイベントでそのチームを見るという事である。よさこいというアンダーグラウンドな界隈を、その世界に入る前に目にするというのはあまり多いことでは無いと思っていた。次いで新歓で誘われたというのが多いのは、学生チームだけでなく、社会人チームも春に学生向けの新歓を行うチームが存在する事を考えると妥当であり、なんならそこが一番多いのでは無いかと筆者は予想していた。

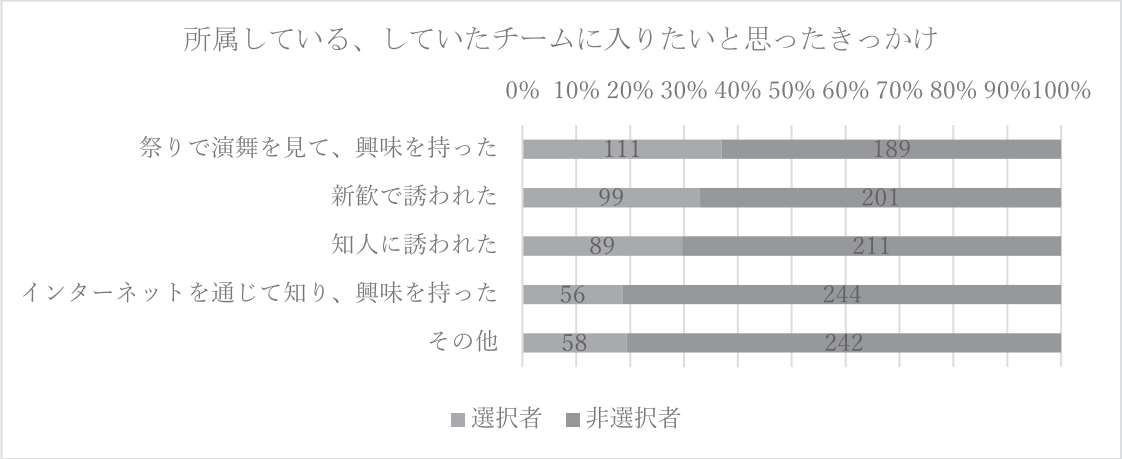

図２　所属している、していたチームに入りたいと思ったきっかけ

◦よさこいをしていく中で、どんな事が楽しいか

これはよさこいを続けていく中でのベネフィットとなり得ると思われる調査である。結果としては、メンバー間での交流が一番多く、次いで舞台上で踊れること、見てくれるお客様の反応が見られること、交友関係の広がりと続いていった。

本稿の調査でよさこいの継続理由を解明していくに当たり、筆者の仮説はよさこいを続けることによって得られるコミュニティを大事にしたいから。というものを挙げている。この調査で一番楽しいと回答されたものが、メンバー間での交流と置かれているのは、仮説が正しくあることに大きく近づいたのではないだろうか。

次いで舞台上で踊れること、見てくれるお客様の反応が見られること、とあるのは、普段生活していく中で感じることのできない非日常感というものをよさこいによって味わえる醍醐味とも呼べるものが挙げられている。これは他のスポーツや趣味などでは味わえないよさこいならではのもので、ある意味よさこいを選んだ大きなポイントになるのでは無いかと感じた。

その下の交友関係の広がりに関して、筆者が体験した交友関係の広がりを元に選択の理由を述べさせていただく。よさこいチームというものは全国各地に存在する。とくによさこいと親しまれる大きな祭りが開催される地域付近には、よさこいチームが多く存在するため、自分の所属するチーム以外にも同じ趣味を持ち、審査のある祭りの時は敵であれ、一つの祭りを盛り上げるという意味では志を同じとする人間が数多く存在するのである。そんなよさこいの界隈には、自分のチームだけでなく、外のチームとの交流も大切にしていこうという事で、交流会なるものが開かれる。筆者が参加した交流会の中には、全国の学生よさこいチームのメンバーが一同に愛知に集まり、交流を深めるといったものがあり、実際に北海道のチー

ムの人や、大分のチームの人など、普通に過ごしているだけでは会う事の無かっただろう人達との交流というものがあり、この交流に楽しみを見出し、よさこいを続けていくといった人間も存在していた。そういった方々の結果が、交友関係の広がりを選択する要因となっているのではないかと推測出来る。

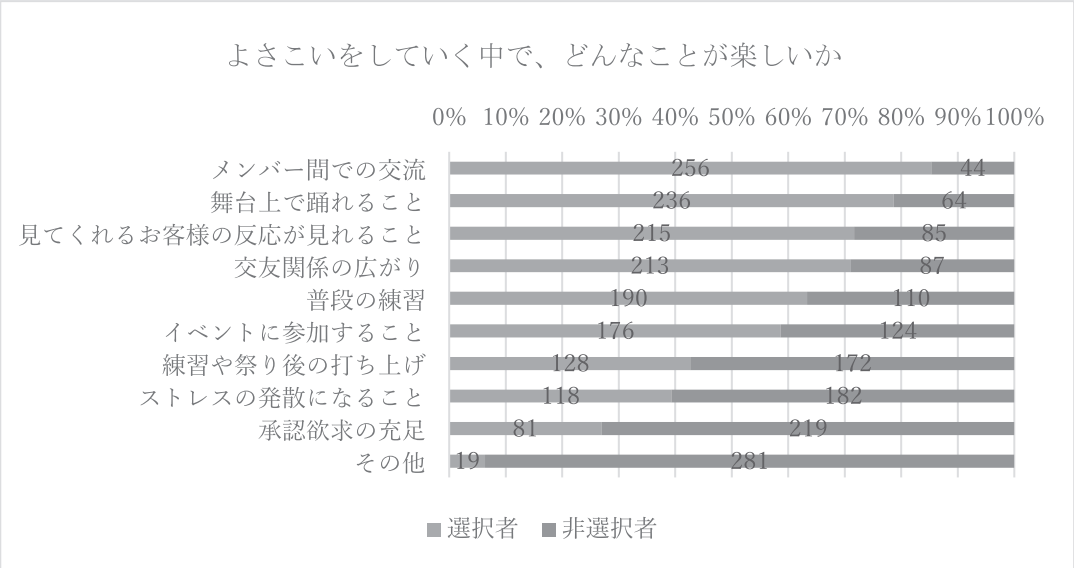

図３　よさこいをしていく中で、どんなことが楽しいか

◦よさこいを継続して参加出来ていた。出来ている理由

本稿の調査において一番知りたいポイントとなっている質問項目である。一番多かったのは踊ることが好きだった、次いでチームが自分の居場所のような存在になっていたから、祭りに参加したいから、舞台で踊りたいから、交友関係をより広げたいからと続いていく。

筆者の仮説であるよさこいを続けることによって得られるコミュニティを大事にしたいから。という点においては、自分の居場所のような存在になっていたからというのが一番多いのではないかと考えていたが、そもそもよさこいチームに所属した時に何をするかと言うと踊る事であり、それを好きでない人間が続けることなど不可能ではないかといったことから、踊ることが好きだったという回答が一番多いのは妥当と考えられる。

次いで挙げられたのが、チームが自分の居場所のような存在になっていたというものであるのはやはり仮説に近い結果なのではないだろうか。回答者数のうち６割近い回答者がチームを自分の居場所だと考えていたことが分かる。ただ裏を返すと４割近い程の回答者が、チームを居場所のような存在だと感じていないという結果にも繋がるため、チームを居場所のような存在だと感じていない回答者の他の質問に対する回答などの関係性についても見ていきたい。

祭りに参加したい。舞台で踊りたい、のニ項目は、よさこいを続けていく中での感じられる非日常感というものが重視されていることを認識し直すことができ、その次に交友関係をより広げたいに入れられているのも、前述した通り交流に楽しみを見出し、よさこいを続けていくといった人が一定数存在する事の裏付けとなった。

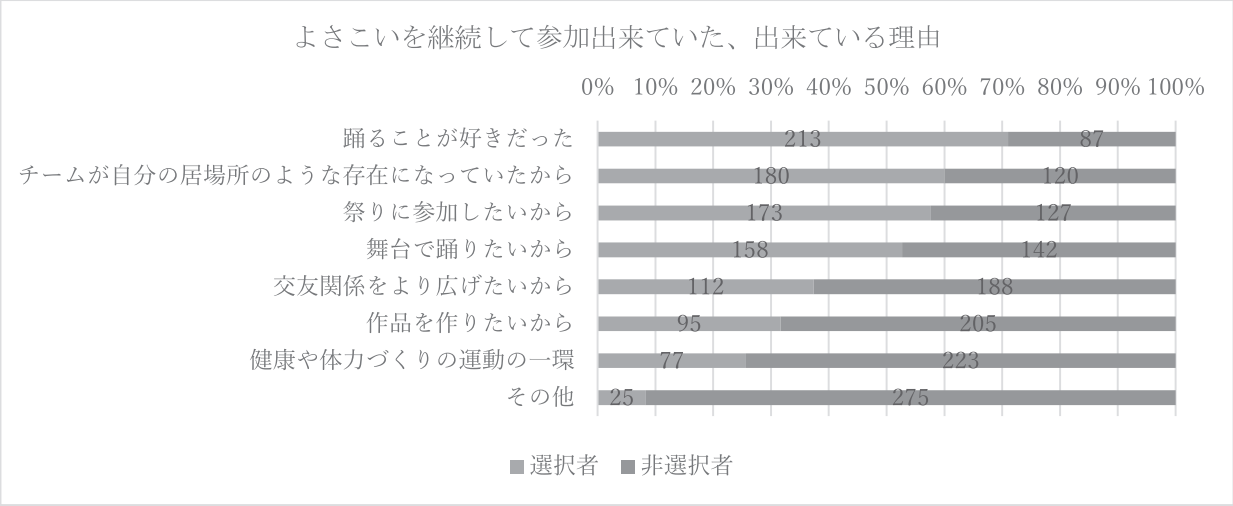

図４　よさこいを継続して参加出来ていた、出来ている理由

◦よさこいを辞めたいと思った事はあるか

よさこいを辞めたいと思ったことがある回答者が半数以上存在する。ここから辞めたいと回答した人向けの質問項目が続く。

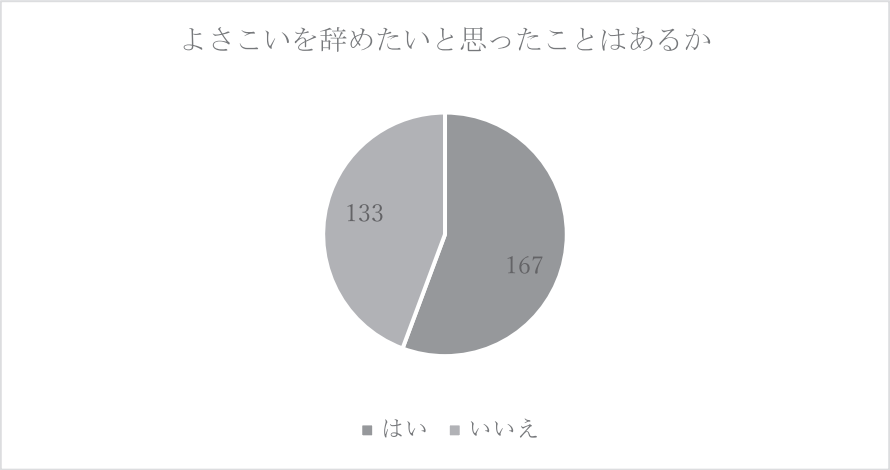

図５　よさこいを辞めたいと思ったことはあるか

◦どのような理由で辞めたいと思ったか

一番多かったのは金銭面を圧迫するからであった。次いでメンバー間との人間関係が良好ではなくなったから、練習や祭りに出るための時間が取れなくなったから、他にやりたいことが出来たからと続いていく。

本稿の最初で述べたように、よさこいには、衣装やチーム運営、更には祭りの参加費など、諸々の費用が発生し、それだけでもバカにならない程の値段である。このコストが辞める一番の要因になっているということが調査結果から判明した。更には大学生などの学生は、日々の練習時間によりバイトに行く時間などが少なくなり、よさこいによる支出だけでなく、よさこいで取られる時間により減る収入という面も存在するため、かなり大きな問題とも思われる。

次いで挙げられたメンバー間との人間関係が良好ではなくなったからというものが、よさ

こいをコミュニティとして見ているかどうかに関わってくる回答だと筆者は考えていたが、その後に続く時間がとれなくなったことや、他にやりたいことが出来たというものと大きく選択者の数が変わる事は無かった。

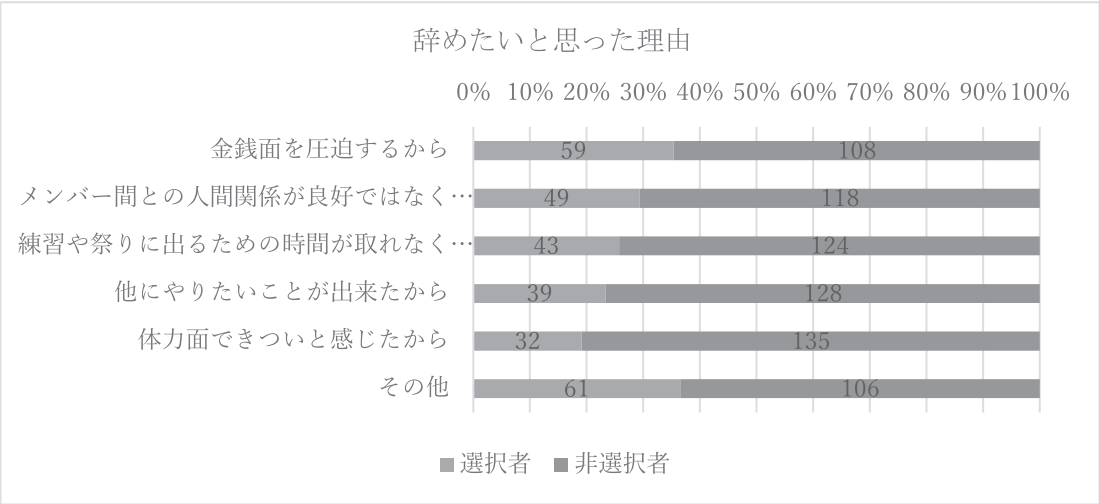

図６　辞めたいと思った理由

◦よさこいチームから自分の意志で脱退した事はあるか

よさこいを続けていく中で、さまざまな理由で辞めたいと感じることがあっても、それでも踏ん張って続けていく人も中には存在する。そういった人がこの調査から半数以上存在することが確認出来た。ここからチームを脱退に至った理由と、辞めたいと感じても辞めなかった理由について記述形式で調査を行っているため、そこについても後に解析していく。

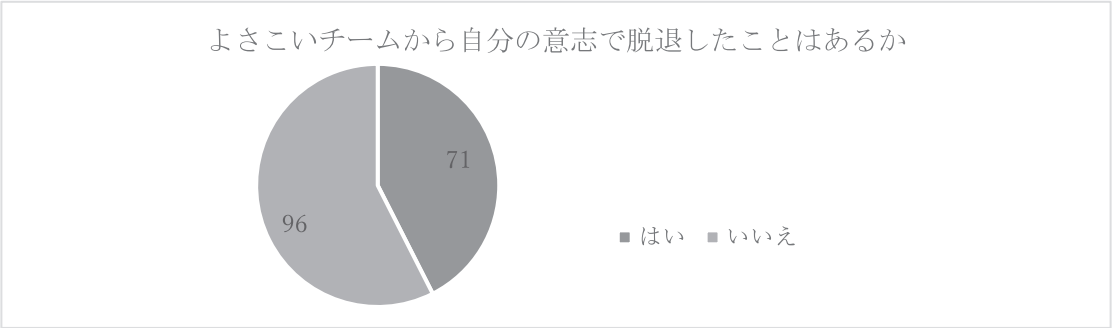

図７　よさこいチームから自分の意志で脱退したことはあるか

◦辞めた後や休止した後、メンバーとの交流はどのくらいの頻度であるか。

よさこいを始めてから今まででよさこいをやっていない期間がある回答者に対しての質問項目である。一番多いのは月に一度交流する程度で、一番少ないのが誰とも交流をしていないという結果であった。つまり定期的にとはいかないが、よさこいから生まれた繋がりを、辞めてもまだ持ち続けているという回答が９割近くあるという回答になった。

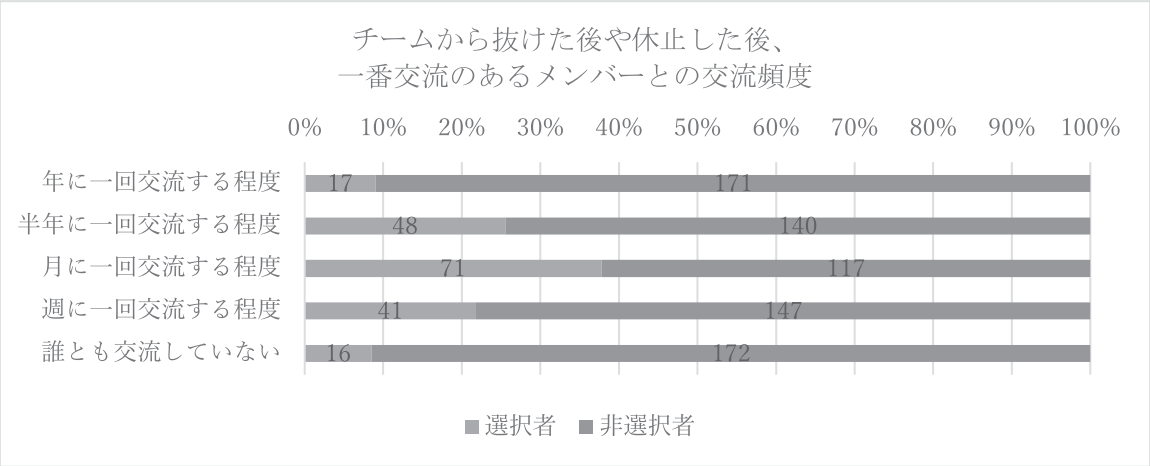

図８　チームから抜けた後や休止した後、一番交流のあるメンバーとの交流頻度

◦よさこいを辞めた時や休止している時、喪失感のようなものを感じたか。

よさこいは多大なコストを支払って行うものであり、生活の時間や、人間関係、自分の人生に大きな影響を良くも悪くも与えてくるものである。そんなよさこいを辞めたことによって何か心に大きな穴のような喪失感を感じるのではないか。そう考えて作った質問項目であるが、結果は半数以上は喪失感があったとのことだが、4 割以上の回答者は喪失感を感じていないとの事であった。

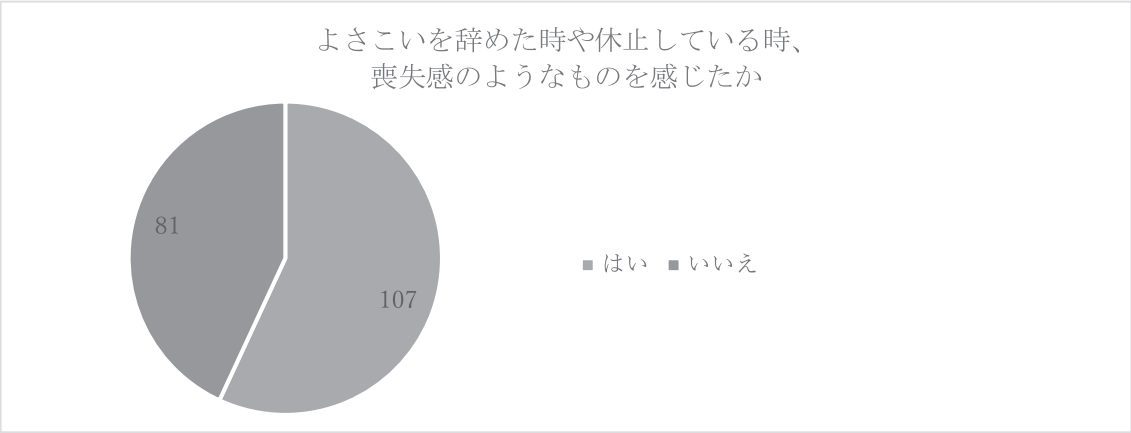

図９　よさこいを辞めた時や休止している時、喪失感のようなものを感じたか

◦喪失感をどのように乗り越えたか

喪失感を感じていた回答者に行った質問であるが、結果として一番多かったのは、バイトや仕事、勉学や就活など、やらなければならないことに打ち込んだ、というものであった。それ以外の回答はほぼ同数であるため、やはり喪失感を埋めるためにはやらなければならないことに専念し、今まで日常であったよさこいというものを忘れていくのが早いのだということが確認できた。

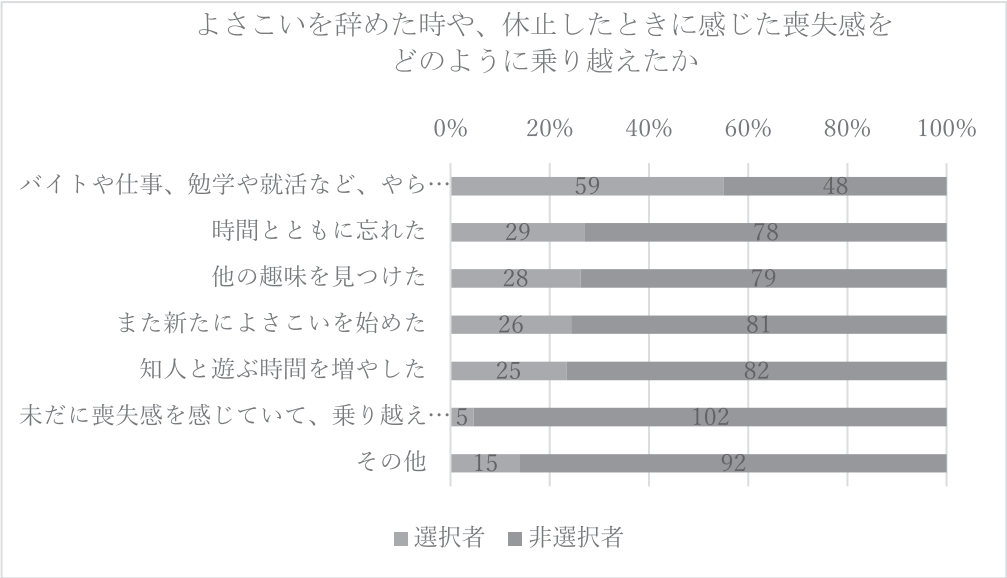

図 10　よさこいを辞めた時や、休止したときに感じた喪失感をどのように乗り越えたか

◦所属している、していたチームに、信頼のおけるメンバーはいるか。
◦所属している、していたチームに、悩みや心配事があった場合に相談したいと思えるメンバーはいるか。

これら二つの質問はメンバーとの関係性が表面上の薄いものであったのか、深いものであるのかについて知るために設置した項目である。

結果としては、信頼のおけるメンバーは 9 割 5 分以上の回答者がいると答えている。しかし悩みや心配事を相談したいと思えるメンバーがいるという回答者数は 9 割に達しなかった。信頼は出来るが相談事を持ちかけるまでには至らないという意見が少数あるということが確認出来た。

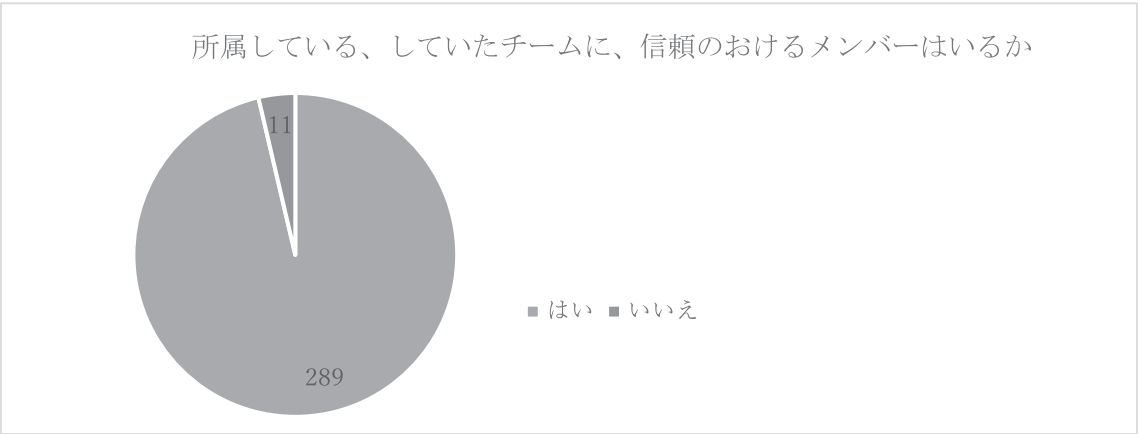

図 11　所属している、していたチームに、信頼のおけるメンバーはいるか

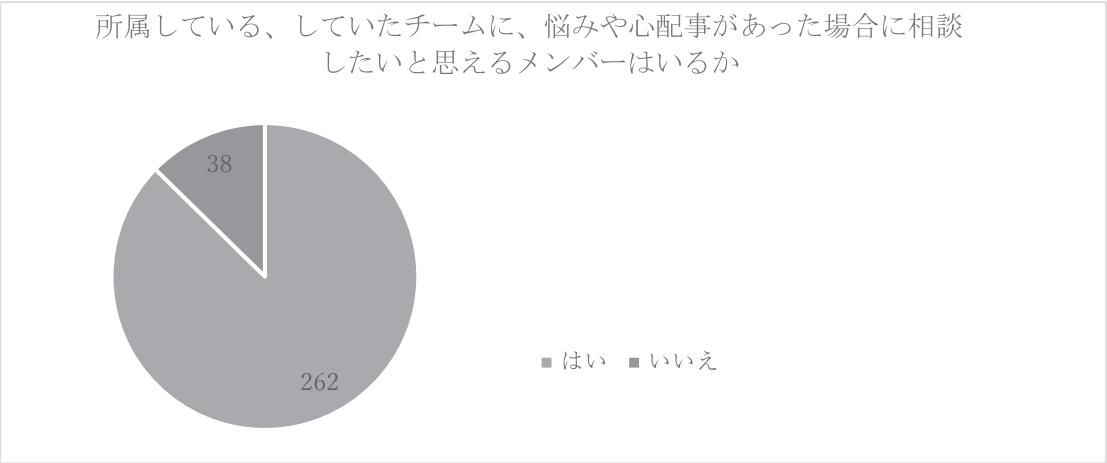

図 12　所属している、していたチームに、悩みや心配事があった場合に相談したいと思えるメンバーはいるか

◦チーム運営や作品制作、その他チームに関する話し合いなどでメンバーとの意見が対立した時、どのような対応をしていたか。

第 1 章の第 2 節で述べたように、友人関係に希薄化が見え始め、多少自分の意見を曲げてでも争うのが避けたいという意見が多く出ているという。

よさこいを通じて一つの作品を作り上げなければいけない回答者はどのような結果になるのかについて設置した質問であるが、結果としては、まずは相手の意見も聞き、お互いが納得できる着地点を探るが一番多く、6 割以上の回答者が選択している。次いでとりあえず意見は出すが、場の流れに合わせていく、そういった場面に参加したことがない、自分の意見を通せるよう説得する、と続いていった。

基本的には相手の意見を聞くという方向性の回答が多いが、自分の意見を一切言わない意見や、完全に相手に合わせていくといった意見はとても少なかった。まず意見を出し、相手からも聞き、お互いの折衷案を探る、もしくは全体の場に合わせていくといった、寄り添い合いながらもしっかりと自分の意見を出すこの結果は、ただ争いを避けるために意見を曲げる希薄化する友情関係とは、異なる性質にあるものではないだろうか。

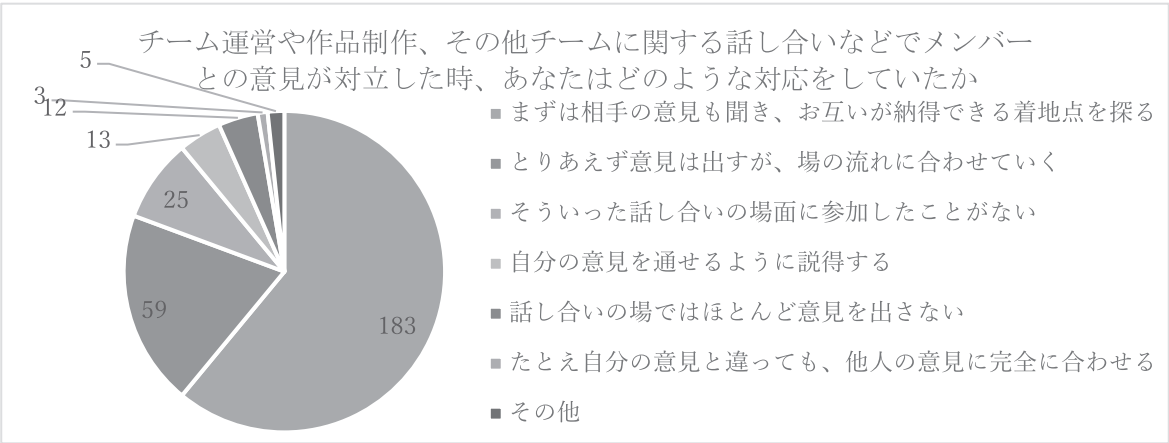

図 13　チーム運営や作品制作、その他チームに関する話し合いなどでメンバーとの意見が対立した時、あなたはどのような対応をしていたか

第３節　記述式の質問項目の結果から

◦チームの脱退した理由

この質問項目は、これまでによさこいを辞めたいと思った事のある回答者の中から、更に自分の意思でチームを脱退した事のある回答者に向けて記述形式で回答していただいた。記述形式での回答のため、これまでのように実数値でグラフとして結果を出すことは出来なかったが、全ての回答を一読させてもらいながら、大まかに似たようなものをまとめた形で読んでいくと、他チームに入る（立ち上げる）ため、仕事の都合で練習場所に行けない（行けるが大変である）、他にやりたいことが出来た、勉強や就活を優先するため、といった内容の意見が重複していた。その他チームとの意識の違いや、コロナで活動が休止してしまったから、潮時と感じたなどもあり、細かく見ると多岐にわたって様々な理由が挙げられていた。

練習場所に行けない事や、行くのが大変の中に、行けないことも無いが練習帰りが終電になってしまったり、仕事に支障が出るという意見もあり、社会人として優先しなければならないものを優先した結果、致し方なくチームを退会したという見方の出来るものもいくつか存在した。

他チームに行くため、立ち上げるためという意見については、社会人チームに所属する人ならではの回答だと思われる。社会人チームは学生チームと違い任期というものが存在せず、自分から辞めるという決断をしない限りいつまででも一つのチームに所属することになる。この後の質問項目で、辞めたいと思ったのに関わらず辞めなかった回答者の結果として、任期最後までやり遂げたいからといった回答が見受けられたが、社会人チームにはそれが無いため、長く同じチームに所属していく中で、他のチームに行きたいとなった時には、一度自らの判断でチームを辞めなければならないのである。これにより同じチームだった人間との関係性が崩れるかどうかは、積み上げてきた信頼関係や、人柄によって大きく変わると思われるため、とても難しい判断なのでは無いかと思われる。

◦なぜ辞めたいと思ったときに辞めなかったのか理由

この質問項目は、これまでによさこいを辞めたいと思った事のある回答者の中から、自分の意思でチームを脱退した事のない回答者に向けて記述形式で回答していただいた。上記の質問と同じように大まかに見たところ、圧倒的に多かったのは友人や仲間の存在があったからという意見であり、その他で言うと学生チームや任期のあるチームに限るであろうが、最後までやり切りたいというもの、あとはチームに迷惑がかかってしまうからというものや、踊りたい気持ちが勝った、よさこい以外での友達やコミュニティが無いからといった意見が重複していた。

一番多いのはやはりメンバーや友人の存在であった。辛い事や嫌な事があっても、他に頑張っている仲間がいるからであったり、引き止めたり、愚痴を言い合える友人がいるから考え直したといった意見である。中には辞めたいと思った理由が人間関係によるものであるか、話を聞いてくれる人もいるから辞めないといった意見もあり、チームを居場所として認知するのが難しくも、その中で信頼できる人を作り上げる事は可能なのだという事例を確認する事が出来た。

自らの意思で辞めた理由についての時にも触れたが、学生チームでは任期というものが存在し、自分の気持ちに関係なくある一定の期間を越えると引退という形でチームを抜ける事

となる。この制度があるからこそ、辞めたいという気持ちが現れても、最後までやり切りたい、途中で投げ出したくない、あと少し我慢すれば変に波風を立てることなく終えることが出来るという気持ちが生まれ、自らの意思で辞める判断を思いとどまる人も一定数存在する事が分かった。

チームに迷惑がかかるというのは、主にチーム運営に携わっていたり、作品制作のための班に所属経験がある人達の意見であった。割り振られた仕事や、今後回ってくるだろう仕事のことを考えると、今ここで自分が抜ける事で他のメンバーにかかる迷惑を考えた時、抜ける事は出来ないと言った、責任感のある意見であった。

他にも様々な理由があったが、辞めたい理由を上回るベネフィットがあり、結局居残る選択をしてしまったというものが多く、そのベネフィットとしてはコミュニティの存在や、ステージで踊る感動、人を笑顔にする瞬間が生まれる事、就職活動にて話題が使えることなどが挙げられていた。

◦あなたにとって、所属している、していたチームはどのような存在か

回答者にとってチームとはどのようなものなのかという事を聞いてみたところ、まずマイナス的な意見より圧倒的にプラスの意見が多かった。マイナスのものとしてはうるさい、求めているものと違った、練習が大変、仕事場のようなものといったものが挙げられたが、その他の意見としては何かしらプラスの意見が入っていたり、良いものである要素しか書かれていないような回答ばかりであった。ただ最初は良くない環境であったものが何かのきっかけで良くなっていったり、逆に最初は居心地の良いものであったのに徐々に良くない場所へと変わっていった回答も何かしらのプラスがある意見としてカウントしているため、悪魔で目安としての測定である。

一番多かったのが、家族や第二の家といったもの、続いて居場所、大切なもの、仲間、大学生活を大きく占めるもの、かけがえのないもの、といったような回答が続いている。

現在も大事にしているのか、もう過去の思い出の居場所として懐かしんでいるのか、今関わりは無いが後輩に対して親のような気持ちでいるのか、様々な思いの寄せ方はあるが、チームに入っていたことを本当に良かったと感じているのだろうと思われる意見が実に多かった。

チームに在籍している中様々な事を学べたという意見もあった。チーム自体が現代社会の縮図であったり、役職を持てばその責任を果たさなくてはならなかったりと、今後の生活にも活かせる経験を積んできたという回答者も存在した。

回答者にとって「チーム」はどのような存在であったかといった質問であるにも関わらず、チーム全体の概要より中にいたメンバーの事や、その関係性について書く回答者が多いのは、やはりよさこいがもたらす人との繋がりや、そのコミュニティがいかに大きなものであるかを再確認出来る結果になったと思われる。

◦現在のよさこいについて、今の心境はどのようなものか

最後の質問では現在のよさこいについて自由記述してもらった。一番多かった記述としては、なんといってもコロナ前の状況に戻って欲しいことや、コロナのせいで思うように活動出来なくて残念であると言った内容であった。そこから来る不安であったり、チームやよさこいそのものの人口が減ってしまうこと、披露の場が無く、モチベーションを保っていける

か、同じメンバーにモチベーションをどう保ってもらえば良いかが分からないといった意見も多かった。よさこいもコロナ禍に入ったことにより活動の幅を一気に狭めてしまっている。特に去年度は何もほとんど活動を行えていなかったチームも多く存在し、大学の部活やサークルとして存在する学生チームなどは学校側から練習を止められてしまうなどという事態も起きていた。学生チームはその年ごとに担当する学年がおり、毎年担当の学年の人達を中心に演舞作品を作り上げる。昨年担当していた学年の人達はほぼ何もすることなく、自分たちの作品を望んだ形で披露することも出来ずに引退していっているため、それを嘆くような意見も挙げられていた。また、コロナ禍において作品の披露の場が現地での演舞から、事前に撮影しておいた映像を配信するといったオンライン形式のものへの変化も起こった。それによって普段見る事のない遠方のチームの演舞を見る事が出来るメリット、間近で見ることで感じる迫力や一緒に掛け声を出すことで感じるライブ感を得られないといったデメリットなどが存在し、オンライン化について言及している回答者も存在した。

コロナに関してだけでなく、それ以前のよさこいの課題や、今盛り下がってしまっているよさこい界隈に対してどのような課題が存在するか思考し、記述してくれる回答者も存在した。

全ての回答を通して感じた事は、これからもよさこいという文化を繋いでいって欲しいという思いを持っている人がとても多いと言う事である。今踊り子として関わる者、現役からは退いているが何かしらで関わりを持とうとする者、もうお祭りに行く事はあまりしてないが過去の思い出のなかによさこいをなくてはならないものとして置く者、どの立場の人であれ、今のままでは悲しい事、また前のような活気あるお祭りをやって欲しい事、更にはこの休止を機に良くなかったものを見直すべきだという事など、よさこいをより良く、活気あるものになって欲しいという気持ちを強く感じる事が出来た。

第3節　よさこいを続ける理由に、自分の居場所となっていると感じていない者の回答

私は今回の調査を行うにあたって、よさこいの継続理由として一番大きいのはチームが自分の居場所のような存在になっているからなのでは無いかと予想していた。結果は60%の回答者はチームを自分の居場所だと感じでいた。しかし40%もの人間が、チームを自分の居場所と感じてないことになる。この40%の人達は他の質問にどのような回答をしているのかについてみていくのがこの節である。

見ていきたい項目が、よさこいをしていく中で、どんなことが楽しいか、という項目の中で、メンバー間での交流を選択している人数。よさこいを辞めたいと思った事がある割合。辞めたいと思った人の中から、メンバー間との人間関係が良好ではなくなったからを選択している人数。所属している、していたチームに信頼のおけるメンバーはいるか。所属している、していたチームに、悩みや心配事があった場合に相談したいと思えるメンバーはいるか。の以上5項目である。

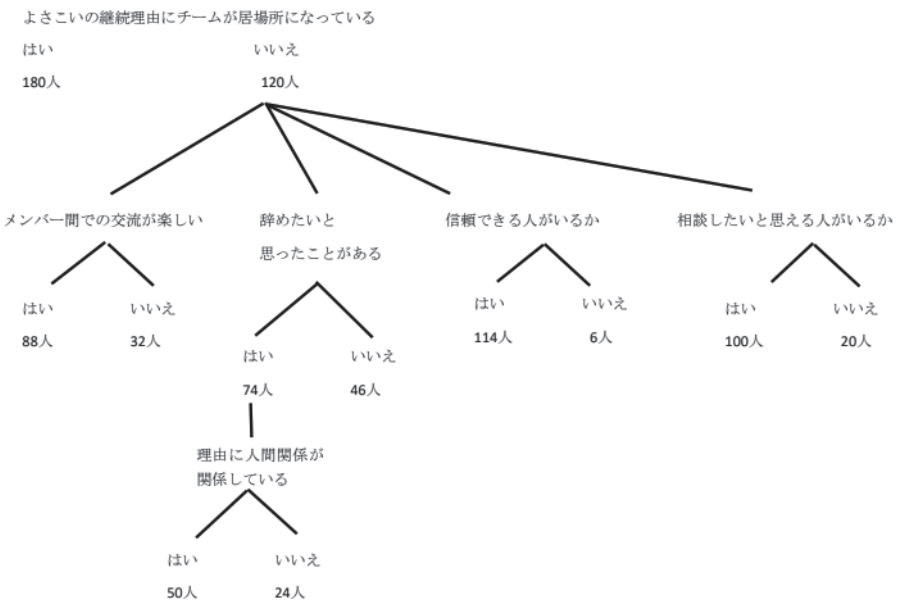

図 14　継続理由が、チームが居場所となっているからではない人たちの回答結果

まずよさこいをしていく中で、どんなことが楽しいか、という項目の中で、メンバー間での交流を選択している人数は、よさこいの継続理由に居場所のような存在になっているを選択していない 120 人のうち 88 人であった。つまりチームを自分の居場所であると感じてはいないが、メンバーとの交流を楽しんでいる人が 70% 以上もいたのである。チーム全体が居場所だとは思っていないが、メンバーとの交流は楽しいという事は、少なからず心の開けるメンバーはいるという人間がかなり多いのであろうか。

次によさこいを辞めたいと思った事があるかどうかについてだが、思った事があるが 74 人、役 62% であり、思った事がないが 46 人、役 38% という結果であった。全体の辞めたいと思った事がある割合が役 56%、思った事がない割合が役 44% と見てみると、若干チームを居場所と感じていない人達の方が感じやすいのでは無いかと感じられる程度の差である。

辞めたいと思った人の中から、メンバー間との人間関係が良好ではなくなったからを選択している人の人数は 25 人である。全体の人数が 49 人であるため、半数以上はチームを居場所と感じていない人が人間関係を理由に辞めたいと感じているという事が判明した。

所属している、していたチームに信頼のおけるメンバーはいるかについては、はいが 114 人、いいえが 6 人。所属している、していたチームに、悩みや心配事があった場合に相談したいと思えるメンバーはいるかについては、はいが 100 人、いいえが 20 人であった。これに関してはそもそも全体で見た時からいいえの回答数が極端に少ない事から妥当な結果なのではないかと考えられる。

以上の事から予測できる事は、よさこいを継続する理由として、チームが自分の居場所のような存在になっているからだと思っていない人達にも、半数以上はメンバーとの交流を楽しいと感じており、信頼出来るメンバーや悩みを相談したいと思えるメンバーはいるという事だ。チーム全体を大きなコミュニティとして捉えるという事が無くてもその中にある程度気のおける友人や仲間は存在するのではないだろうか。ただ人間関係から辞めたいと感じる人の割合は全体からしても半数以上いる。これに関しては自分自身が居場所と感じれていな

いために人間関係から問題が発生してしまうのか、人間関係に問題を抱えているためチーム全体を居場所と思えないのか、どちらが先なのかは結果として分からないが、相互関係があるのではないかと考えられる。

第 4 節　記述式回答の語彙の統計から

KH コーダーという分析用ソフトウェアを用いて、記述式解答の質問に挙げられた語彙が、どのような繋がりや法則があるのかについて読み取っていこうと思う。

図 15 は所属している、していたチームはどのような存在であるかの質問の解答で、用いられた回数の多い語彙にどのような繋がりがあるかについて、共起ネットワークを見てみるものである。

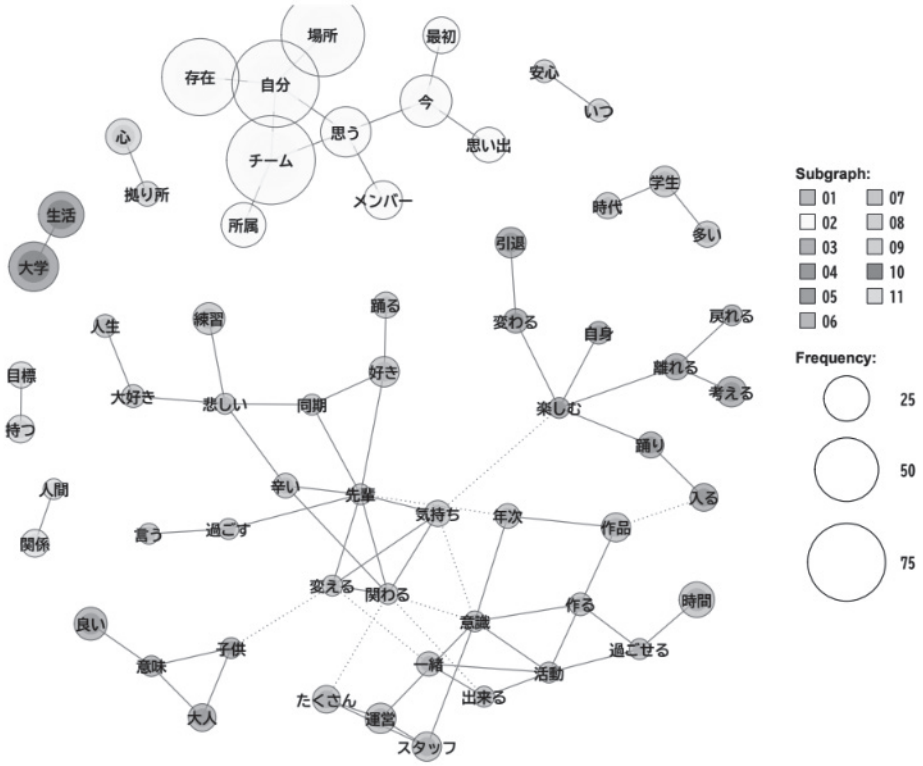

図 15　チームがどのような存在であったかの共起ネットワーク

丸の大きさが頻度の大きさであり、上方の自分、場所、存在、チームなどが多く、さらに同じ文でよく使用されている事が見て取れる。今、思い出、などの言葉も繋がっている事から、何かしらの理由で所属していたチームを抜けた人にとっても、今は思い出になっているといった事が想像出来る。

その他様々な言葉が結びついている部分を見ていく。右下の時間、過ごせる、活動などが結びついている固まりには、作品、作る、意識、一緒、スタッフ、運営、年次などがある事から自分達が主体となる年次から、スタッフや運営と一緒に作品を作っていた事に関して述べていた人が多い様に見て取れる。中央左側の、先輩、同期、好き、気持ちなどが繋がっている固まりからは、踊る、悲しい、大好き、練習、過ごすなどがある事から、練習を共にする先輩や同期に対する気持ちなどが述べられていた事が見て取れる。練習という単語と結びついているのが悲しいという単語だけなのは、このご時世なかなか練習が出来なくて悲しい

といった事なのであろうか。

次に図 16 では所属している、していたチームはどのような存在であるかの質問の解答に、よさこいを辞めたいと思った事があるかどうかについての解答を外部変数として対応分析してみた結果である。

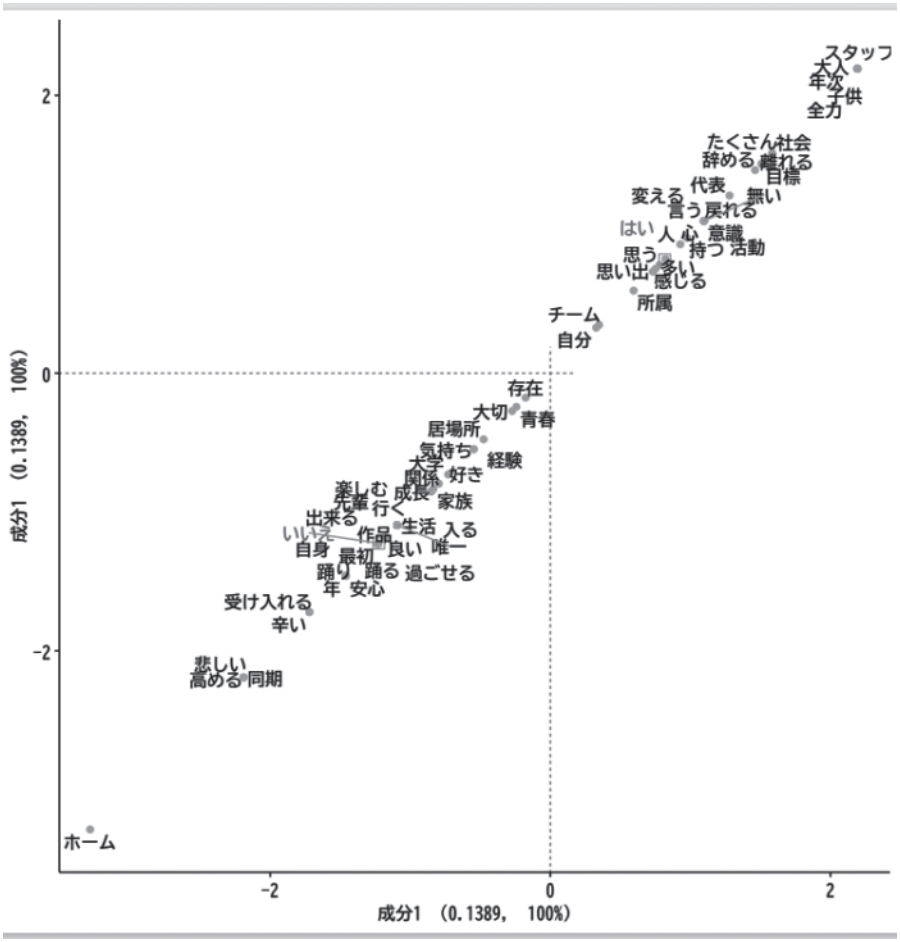

図 16　チームがどのような存在であったかの対応分析図

辞めたいと思った事があるにはいと答えた解答といいえと答えた解答の周りにそれぞれ固まりがあるのが見て取れる。

はいの方には思う、思い出、感じる、心、人などが近くにあり、少し離れて社会、離れる、辞める、目標、無いなどが羅列されている。いいえの方には作品、踊る、良い、生活、唯一、安心などが近くにあり、少し離れて同期、高める、悲しい、受け入れる、家族、関係、居場所などがある。ここから何かを考察するのは難しいが、強いて言うなら辞めたいと感じる方には社会、辞める、離れるが集まっている事から、社会に出る事を機会に離れたり辞めた人が一定数存在すること、意識、持つ、活動、代表などから、チームに対して意識を持ったり、代表などの重責なポジションで活動を行っていた人もいるのではないかと考えられる。辞めたいと思ったことが無い人は、安心、唯一、過ごせる、楽しむ、作品、良いから、チームそのものやそこで作る作品を良いものとして考え、安心できる唯一の場所だと考えていること、同期、辛い、高める、悲しいなどから、共に辛い練習などでも高めあえる同期と会えなくなる状況に悲しみを持っている人が多いのでは無いかと考えられる。

図 17 はよさこいに対する今の心境を自由記述で書いてもらった解答の共起ネットワークを見ていくものである。

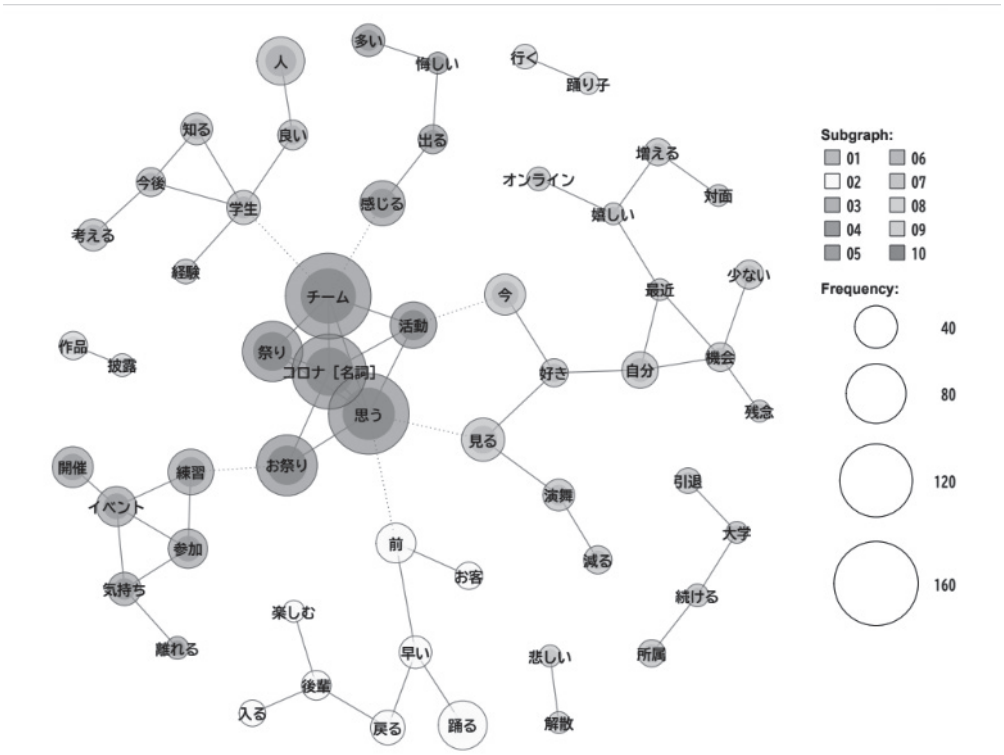

図 17　よさこいに対する今の心境の共起ネットワーク

一番多い語彙はチーム、コロナ、思う、祭りなどである。そこから様々な語彙に転線の様につながっている。右方向の最近、機会、少ない残念などがある方を見ていくと、最近演舞の機会が減っており残念だという話や、対面でのイベントが増えて嬉しいという話、好きな演舞を見る機会が減っているといった話がされている事が見て取れる。下の方の踊る、早い、戻る、後輩などが固まる箇所を見てみると、早くお客様の前に出たい、早く踊りたい、早く戻って欲しいという話や、後輩に楽しんで欲しい、入って欲しいという話が挙がっている事が予想出来る。左下の方の練習、参加、イベント、開催などが固まる場所からは、練習やイベントに参加したい、イベントを開催して欲しい、気持ちが離れてしまうといった話があったことが考えられる。左上の方の今後、人、良い、学生などが固まっているところからは、学生時代に出来る経験についてや周りの人が良いこと、学生がコロナ以前を知らない事、今後の活動について考えていることなどの話をしている事が考えられる。

図 18 では、よさこいに対する今の心境を自由記述で書いてもらった解答に、よさこいを辞めたいと思った事があるかどうかについての解答を外部変数として対応分析してみた結果である。

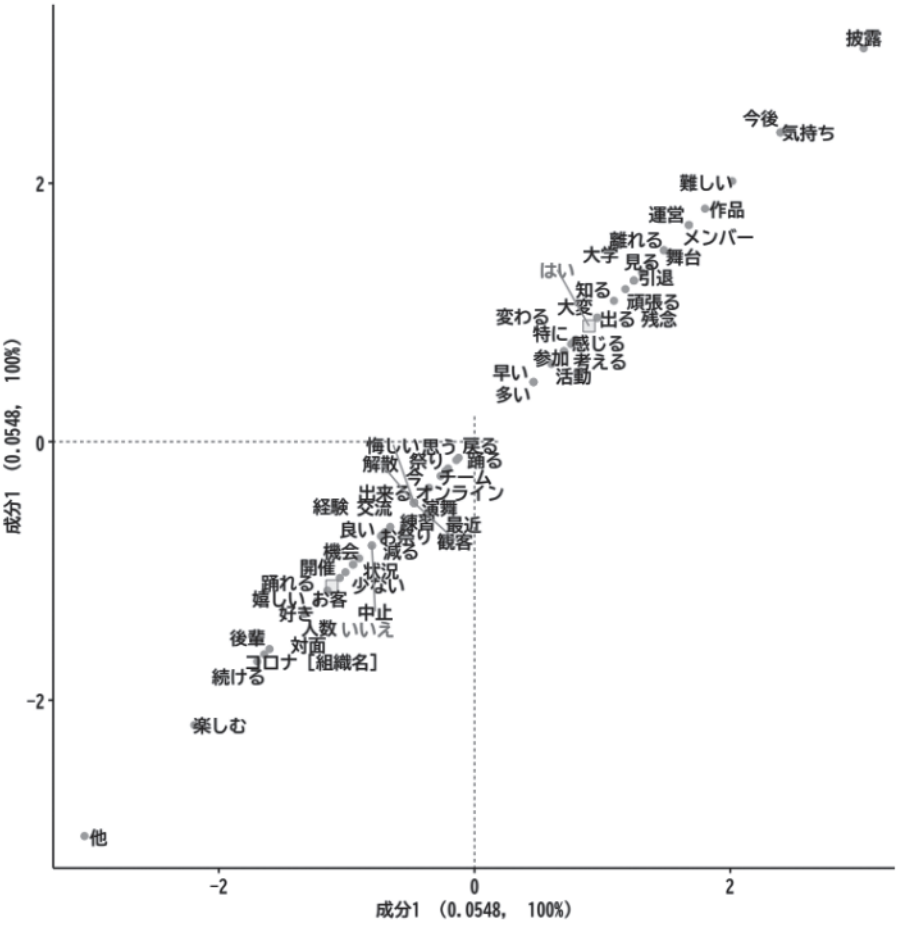

図 18　よさこいに対する今の心境の対応分析図

辞めたいと思った事のある回答の周りには大変、感じる、活動、残念などがあり、少し離れて運営、メンバー、作品、難しいなどの言葉がある。辞めたいと思った事のない回答の周りには開催、踊れる、お客、機会、少ないなどがあり、少し離れて後輩、コロナ、続ける、解散、悔しい、練習、オンラインなどがある。ここからの考察もまた難しいものとなるが、辞めたいと考えた事のある回答者は運営や作品を作って行くことが難しい、メンバーの気持ちなどが離れていってしまう、引退するまでは頑張る、活動に参加するのが大変などの話があるように考えられる。辞めたいと考えた事のない回答者は、お祭りや交流会が中止されている状況や、演舞の機会が減っていったり少ないこと、対面で踊れる事が嬉しいことについて述べていると考えられる。

図 19 ではやめたいと思った事はあるものの、チームを辞めなかった回答者の継続理由についての記述の共起ネットワークを見ていく。

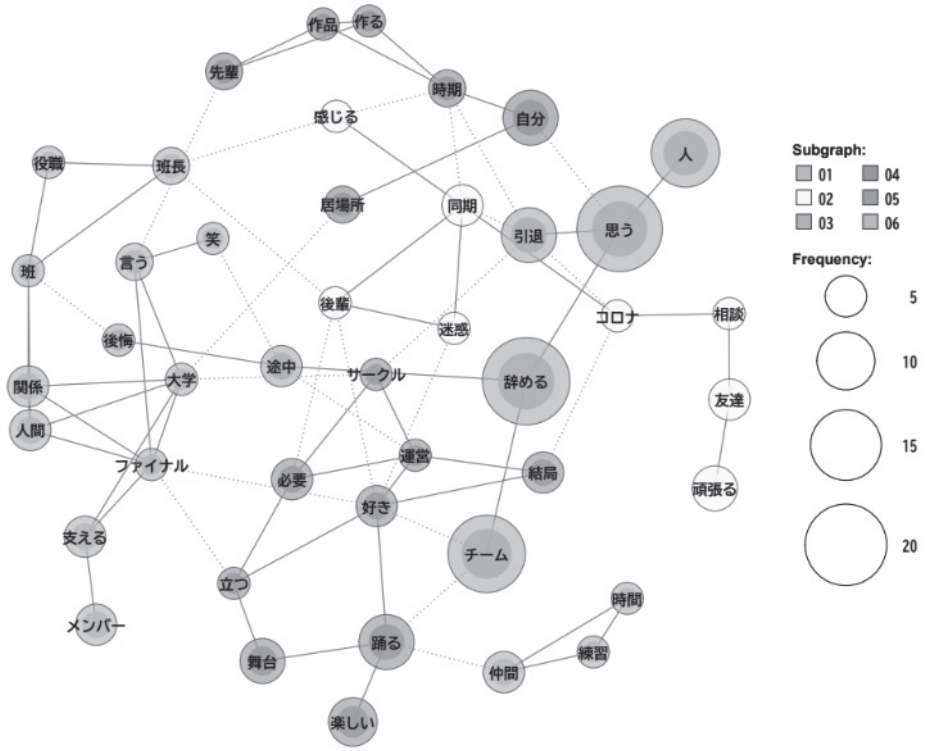

図 19　やめたいと思った事はあるものの、チームを辞めなかった回答者の継続理由についての記述の共起ネットワーク

今回の共起ネットワークは、これまでの２つと比べて入り組み方が凄く、KH コーダーが色分けした語彙も一部分に固まるわけでなく、他の色の語彙と混じりながら幅広く配置されているものもある。

語彙数として多く見られたのは右上から中央方向に伸びているグループで思う、辞める、チームの三つであり、そこから人、引退、途中、後悔と繋がっているが、途中は中央、後悔は左、チームは下方向に伸びていて、固まりにはなっていない。途中の周りにはサークル、運営、必要などが伸びており、結局舞台に立つことや踊る事が楽しい、あるいは、好きであること、サークルの運営に必要であるという事、更に途中でサークルを抜けられないというような話が挙げられている事を考えられる。後悔の周りには人間、関係、ファイナル、大学、班、役職などの言葉があり、班長や役職につくこと、班や大学での人間関係について、ファイナルを目指しメンバーと支え合っていること、更に班を途中で辞めれば後悔するといったことを挙げられている事が考えられる。チームの周りも途中の周りと同じグループが広がっているが、チームから踊るという言葉を繋ぎ、仲間、練習、時間という言葉が三角を作っており、仲間との練習の時間、チームの仲間と踊る時間などについて挙げられていると考えられる。上の方のグループからは自分、居場所、作品、作るなどの言葉があり、自分にとって居場所であること､先輩の様に作品を作りたいといったことを挙げられていると考えられる。右端から中央上側に伸びているグループは、友達、相談、コロナ、同期などの言葉があり、友達に相談をしていることや、友達がいるから頑張れること、同期や後輩に迷惑をかけてしまうこと、他グループと語彙の繋がりから、後輩が好き、あるいは、後輩に必要とされているような事を挙げている事が考えられる。

これらから見えるものは、辞めたいと思うまでのコストを抱えながらも続けるに至るベネ

フィットを分析して図としているものであるため、本稿の最終目的にとって最重要である結果であると思われる。

第３章　よさこいが作り出す縁

第１節　よさこいの継続理由

これまでのアンケートを元に、よさこいを行う人達にとって、継続理由となり得るものをまとめていく。これまで述べてきた結果と考察から、よさこいを継続していく理由として第一に、自分の居場所と思える場所が出来る。第二に、信頼出来る友人や仲間が出来る。第三に、舞台やお祭りで踊りたいから。第四に、目指すべき目標が生まれるから。１つずつ詳しく明らかにしていく。

第一の、「自分の居場所と思える場所が出来る」は、筆者の仮説通り、自分のチームや一緒によさこいを盛り上げる人々の間で、一つの居場所のようなコミュニティを形成出来るからである。これは６割の回答者がアンケートの回答で選択しているため、継続理由の一つとして確実に含まれると感じている。所属しているチームについての質問項目でも、家族という言葉が多かったように、チーム全体を自分の居場所だと感じている回答者は大勢いる。居場所と思える関係は、相手の性格と自分が合うのか、所属する団体がどんな雰囲気であるかも重要であるが、それよりもチームメンバーの為に何が出来るかを考え、時間をかけて関係性を積み上げて行くことが一番重要と考えられる。そうして積み上げてきた関係を簡単に手放す事は難しく、それが責任として重くのしかかってしまう事もまた継続せざるを得なくなる理由にもなっているのかもしれないが、良くも悪くもこのよさこいによって生まれる居場所が、よさこいと人を繋ぎ止める大きな理由となっている。

第二の、「信頼出来る友人や仲間が出来る」は、一見第一の理由と同じに見えるだろうが違う部分が存在する。チーム全体を居場所だと感じていなくとも人との関係により所属し続ける事はあるということだ。小中高校などに通う間に入るクラスという枠組みの中に、仲のいいグループがいくつか存在し、グループを超えて仲良くしていける人もいるが、同じグループでない人とは同じクラスであっても一切仲良くしていない人がいるという場面はよくあるものだと思われる。よさこいほど一つのチームの規模が大きければ、そういったことも起こり得るであろう。それが継続理由にチームを居場所である事を選択していないが、メンバー間での交流は楽しく、信頼でき、悩みを相談できるメンバーもいるという回答者の心境なのではないか。チーム自体にコミュニティとしての存在は求めてないが、少人数でも仲が良い人が出来、少人数との関わり合いを居場所だと感じることがあれば、チームを抜けて共通点が無くなった時に関わりが無くなるのを危ぶみ、よさこいを継続する理由になり得ると考えられる。つまるところ第一の理由の規模をチームとして捉えなくても理由になるというのが第二の理由に当たる。

第三の、「舞台やお祭りで踊りたいから」は、そのまんまの意味であり、継続理由を聞いたアンケートでも選んだ回答者が多かった事から考えられる。舞台やお祭りで人前に立ち踊るなどという事は普通に生きているだけだとなかなか味わえないものだ。そういった経験で味わう快感や興奮、熱気を忘れられずによさこいを続けてしまうという事もあると思われる。さらによさこいの継続理由として１番多かった回答が踊りたいからとあったことから踊りの良さにも一度気づいてしまっているため、より深くのめり込んでしまう人が多いのではない

か。ダンスなどと違い、舞台に立つ人数の多さから、恥ずかしいという気持ちが薄まり、立ちやすい舞台である事も理由と考えられる。

第四の、「目指すべき目標が生まれるから」は、祭りで賞をもらうから、というものだけでなく、チームでの活動をやり切るというような目標も含まれる。よさこいを辞めたいと思ったが辞めなかった人の理由に、友人や仲間の存在に次いで多かった最後までやりきりたい、途中で辞めるのは嫌だといったところから読み取れる。これは引退の存在する学生チームだったり、中心的にチームを動かす任期が決まっているチームに限られるがそういったチームは多く存在するため、これらを目標にやり切るまでよさこいを続ける理由になり得る。もちろん祭りで大きな賞をもらうという目標も、継続の原動力になり得るであろう。

上記の4点から、お金や時間、体力などの大きなコストがかかるよさこいの継続理由は、継続していく事で得られる居場所などのベネフィットだけでなく、辞められない責任や本人の意地など、様々なものが交錯しており、それらを抱えながら一つの組織に属し、時に悩み、動かし、踊り続ける事が成長にも繋がり、かけがえのない思い出にもなっていく。踊る事で感動を与え、そして与えられ、隣で同じように頑張る仲間や違うチームに感化され、意見をぶつけ合い、また踊る。関係のない人には無駄とも思えるよさこいという文化は、一度その輪に飛び込み熱狂する者たちにとってはその人の人生観を大きく変えるほど心を揺さぶる経験を、試練を、感動を与えてくれるものなのである。

第2節　今後のよさこいのゆくえ

本稿では、よさこいの継続理由とはなんなのかについて考察してきた。結果としてコストを超えるほどのベネフィットがあるだけでなく、責任や意地から続けてしまう事もあることが明らかになった。しかしよさこいを継続してきた事はその人々の中で大きな思い出や、かけがえのないものへと昇華している回答者が圧倒的であり、またその魅力から長年続けてしまう人も確実に存在する。コロナによってこれまでのような活動から様変わりし、よさこいの魅力が大幅に激減した激動の時代であったが、代わりのやり方を見つけたり、徐々に規制が解けてきたりと再び盛り上がりを見せてくれようとするよさこい界隈。損失は決して小さいものではないが、各地で祭りが定期的に開催され、多くの人がごった返すあの日常を取り戻せる事、そこでよさこいの魅力を多くの人が感じてくれる事を強く願っている。

今回は自分がチームなどで関わった事のある人達にLINEやInstagramでアンケートを回したのと、Twitterにて多くのよさこい経験者にアンケートを回した。そして回答者の多くはTwitterにて協力してくれた全く知らない人も多く存在する。この回答者の方々から見ると、よさこいを続けてきた者からしたら当たり前の結果に繋がっているだけであり、見る価値の無い調査のように思う方もいるだろう。しかしよさこいに触れたことのない方々からすれば、なぜ多くの人があんなに暑い真夏に踊り続けるのか、理解するための一歩になり得る調査であったと筆者は確信している。また、ここで考えられる事としてこのアンケートを受け取ってくれた人は私の知り合いとよさこいで繋がった人をTwitterでフォローなどしている。つまりよさこいの情報をネットから得ようとしており、このアンケートが目につくという事はそもそもよさこいに対して関心を持っている人間なのではという事が予測される。つまりよさこい自体はやっていたが今は一切興味ない。なんなら嫌いにまでなってしまった。といった人に対してはアンケートを回答して貰えていないのである。これを本稿では扱う事が出来なかった残された課題とすることで、本稿を締めくくりたい。

参考文献

・デボラ・チェンバース著、辻大介・久保田祐之・東園子・藤田智博訳『友情化する社会』岩波書店、2015 年
・石田光規『孤立不安社会』勁草書房、2018 年
・石田光規『友人の社会史』晃洋書房、2021 年
・よさこい情報｜高知県庁ホームページ（https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/111602/kanko-yosakoi.html　閲覧日：2021 年 11 月 30 日）
・歴史証言「あのころ」 水野孝一さん｜歴史証言「あのころ」｜学校法人 梅村学園（https://www.umemura.ac.jp/school-history/in-those-days/person17.html 閲覧日：2021 年 11 月 30 日）